

龍樹時代におけるアーンドラの社会と仏教

佐々木 教悟

一

インド古代の有名な仏教哲学者にして大乘仏教思想の体系化に偉大な貢献をなしたナーガルジュナ(Nāgārjuna 龍樹)の学説に関しては、すでにいくたの研究が発表されていて、その仏教思想上占める位置の重要性は、一般のひとしく認めるところとなっている^①。しかるに、まさしく大徳ナーガルジュナなる名が現在までに

発見されている碑文にあらわれるのは、ただの一回のみである^②という事実が物語るように、かれの生涯にける具体的実績もさだかでなく、またその時代の社会の状況や一般民衆の生活ないし宗教儀礼などについてもあきらかとはいえないものがある。小論はナーガルジュナ研究の一部門として、かれが活動したとみられる紀元二世

紀の中葉から三世紀の中葉にかけての時代、ならびにアーンドラ・デーシャ(Āndhradeśa)と呼ばれた地域を中心とする南インドに焦点をおいて、その当時の社会状態や仏教普及の模様について、これまでに発表された諸学者の研究に若干の私見をまじえてまとめてみたものである。

ちなみにアーンドラ・デーシャは、ほぼ今日のアーンドラ・プラデーシュ(Āndhura Pradesh アーンドラ州)に相当するが、その地域的限定については、ラモート教授が論じており、いまはその教授の見解を参考にしてのべてゆくことにしたい

二

アーンドラ族は古くからゴダーヴァリー(Godava-

in)とクリシナナー (Kṛṣṇā) の両河のあいだにはさまれた地域に居住しており、アーリヤ族の住む地域と境を接していたところから、かれらはアーリヤ人とドラヴィダ (Dravida) 系の他の種族との混血によってあらわれた種族でなからうかといわれている。

かれらはのちにテルグ語 (Telugu language) を話す住民として知られるようになった。チベットの文献がナーガールジュナの出身地とつたえるヴィダルバ (Vidarbha) が、ダクシナパタ (Dakṣiṇāpata 南路、南国) におけるアーリヤ人の最初の安定した国家であったこと、および南インドにおける *aryanization* に関しては、以前に考察したごとくである。ナーガールジュナがヴィダルバのバラモンの家庭に生まれたという説を否定する材料はどこにもない。

西紀前三世紀にマウリヤ王国が栄えたころ、マウリヤ王朝の勢力がゴダーヴァリー河以南の地方にまで及び、かのアシヨーク王の、いわゆる〈法による勝利〉*dharmavijaya*と称せられる仏教的勸化がアーンドラ人に対してもおこなわれたことは、すでに法勅が物語っている。すなわち、そのころアーンドラは土族的集団としてマウリヤの支配下にあったのである。しかるところ、ア

シヨーク王の死 (232 B. C. by Majumdar) を契機として、マウリヤ王朝の勢力の衰退がおこり、アーンドラはマウリヤの桎梏から脱して独立の国家を樹立したといわれている。これが、いわゆるアーンドラ王国と呼ばれるものである。その国家樹立の正確な年代を決定することは現在のところ困難であるが、プラーナ (Purāṇa) のリストの暗示するところにしたがって、最初の王がシムカ (Simuka) であり、かれの統治の開始はアシヨーク王の死后間もないころ、すなわち、前二三〇年のころとする説は、アーンドラのそのちに続く王の事績などから推定して、ほぼ妥当であるとかんがえられる。シムカの *kula* (種性・王家) はシャータヴァーハナ (*Śāta-vāhana, śātavāhana, śālivāhana*) であった。シムカのち、このシャータヴァーハナ王朝はカンハ (*Kanha or Kṛṣṇa*)、シュリー・シャータカルニー世 (*Śrī Śāta-karnī*) と次第してうけつがれていったが、最初のころの都は、シムカなる名に関係のあるところの、^⑥ カリンガの方に近いシュリー・カークラム (*Śrī Kākulam*) であったともいわれる。しかるに、カンハのとき、王国が西方に拡大されてゴダーヴァリー河上流の要衝プラティシュターナ (*Pratiṣṭhāna*) にも都がおかれた。それは地

理的にみて西部の都であった。そしてたぶんその前後の時期に、東部の都として、シュリー・カークラムにかわってクリシュナー地区のダーニヤカタカ (Dhanyakata-ka) が栄えるようになったとかんがえられる。

ところで、シャータヴァーハナ王朝の諸王の中で、一般によく知られている王は、「サッタ・サイー (Sat-ta-sai)」なる抒情詩の編纂者として知られているハーラ (Hala, 20—24AD.) と「シャカ (Śaka)」、パフラヴァ (Pahlava)、『ヤヴァナ (Yavana) の撃退者として』、もっぱらデカン西部において活躍したとみられるガウタミープトラ・シャータカルニ (Gautamīputra śātakarni, 80—104AD.) と「東部と西部との両方の管理を保持しえた最後の王とかんがえられているシュリ・ヤジュニヤ・シャータカルニ (Śrī Yajña Śātakarni, 170—199AD. circa.) とである。発見された貨幣等からなおいくたの王の名が知られるが、プルマイイ二世 (Pulmāyi II, 211—225AD. by Poussin) にいたって、この王朝は没落したといわれている。その没落の理由については、現在においてもなんら知られていない。

シャータヴァーハナ王朝の没落后、広大な領土の北西部にあってはアービーラ (Ābhīra) が、南部にあっ

てはチュトゥ (Chutu) が、アーンドラ・デーシャにあってはイークシュヴァーク (Ikṣvaku) が、マディヤ・ブラデーデュ (Madhya Pradesh) にあってはシャータヴァーハナ自身の血統をひく諸王が支配を続けたことが明かとなっている。これをもうすこし詳細にのべるならば、上部マハラーシュトラ (Mahārāṣṭra) のナーシク (Nasik) とベラル (Berar) に前掲のアービーラとちうにヴァーカータカ (Vakātaka) が、クリシュナーと西部ゴダーヴァリー地区に前掲のイークシュヴァークとならにシャランカーヤナ (Śaṭaṅkayana) が、マドラスに近いカーンチー (Kāñchi) にはパッラヴァ (Pallava) が、北部カナラ (Kanara) におけるヴィジャヤンティ (Vijayanṭi)、『あるいはバナヴァーシ (Banaṇvāsi) にはカデンバ (Kadamba) が、それぞれ興起するといふように』、いくたの王家によって小王国が分立したのであった。このようにして、シャータヴァーハナ王朝によって維持されてきたデカンの政治的統一は、ほぼ三世紀の中葉をさかいとして破壊されて、諸小勢力の分立の時代にはいったのである。

上にあげた諸王朝の中でも、アーンドラ・デーシャに關係するものとしてとくに注目されるものは、シャータ

ヴァーハナはもちろんとして、その他にナーガールジュナコンダ(Nāgarjunakonda)にヴィジャヤプリー(Vijayapuri)なる都をもったイークシュヴァーク朝(225—340AD. circa.)と、ヴェンギープラ(Vengīpura)を都として西ゴードーヴァリー地区を支配したシャーランカーヤナ朝(275—450AD. circa.)であろう。その王朝の名を一瞥するならば、前者は積尊をイークシュヴァーク(甘蔗〔王〕)の後裔とする仏教徒の伝承と同一の伝承のもとに、王家のほまれをかかげていることが示すように、仏教外護者の諸王、なканずく諸王妃をもったが、後者はシャーランカーヤナがヴェーダのリシ(ṛṣi、聖仙)であり、そのゴートラ(gotra、種姓)がヴェンギーの王朝によって継承されたとする由来をもっている。そしてまた、シャーランカーヤナがシヴァ神の乗物である牡牛ナンデイン(Nandin)を示す語であることから推定されるように、ヒンドウの諸王をもったのであった。

三

シャータヴァーハナ王朝は、デカンの東西にわたる広大な領土を保有したにもかかわらず、その政体はきわめ

てシンプルなものであり、地方の行政は中央政府の統轄的管理を受ける封臣たちに、その大部分が委ねられていた模様である。かれらはおよそ三つのクラスにわかれていた。すなわち、自らの名において貨幣を鑄造することが認められていたラージャ(Rāja)と、西部デカンの少数の家柄に限られていたマハーボージャ(Mahābhōja)、マハーラティ(Mahārathi)と、マハーセーナパティ(Mahāsēnāpati)と称する地位についたものである。この中、マハーラティは婚姻関係によってシャータヴァーハナ家と結びついたものといわれている。マハーセーナパティには辺境の地区を委託されたものと、中央においてそれぞれの省を管理するものがあつた。地方の政府はそれぞれ一名のアマーティヤ(amātya、大臣)の下にいくつかのアーハラ(cāhara、行政区)が区分されており、かようなアーハラにおのおのそのグラミカ(grāṃika、村長)をもつ村落があつた。都市は高い城壁で囲まれていたが、それには煉瓦や漆喰で造られた城門があり、城門のなかにはサーンチー(Sāñci)のストゥーパ(Stūpa)にみられるようなトーラナ(torana)をもつものがあつた。プリニウス(Plinius)の記すところによれば、アーンドラ国内には、三〇の都城、および

その他におびただしい数の村落があり、一〇万の歩兵、二千の騎兵、一千の象(軍)を保有していたことが知られる。

国内には農民が多かったことはもちろんであるが、商業に従事する者も増していた。住民の職業として碑文にその名のあらわれているものをあげるならば、管財官、記録保管者、大使、執事、会計係、貨幣鑄造者、金細工師、玄関番などがある。学者はとくにこの時代に、一般農民層にゴリカ(*golika* 牧牛者)、ハリーカ(*halika* 農耕者)といった新しいサブ・カーストが職業的な基盤の上に形成されつつあったことに注目している^⑧。

なおこの時期に東西貿易が盛んとなり、ローマの貨幣が流入して経済が活潑となったことと、したがって国内に銀行業が栄え、多くの豪商が出現したこと、また穀物商、真鍮細工師、織物工、花卉販売業者、鉄器商、写真などの同業組合などがつくられていたことは、すでによく知られているところである。その当時航海に従事した船長の記すところによれば、バリュガザ(*Barygaza* 現在の Broach)——パイタナ(*Paihana* 前述のプラティシュターナ)——タガラ(*Tagara* 現在の Ter)——マスリパトナム(*Masulipatanam*)を結ぶアードラ

国内の主要通商路があり、輸出入の品の運送がおこなわれていたことを知る。とくにマサリアー(*Masalia*)地方、すなわちクリシュナー河の河口に近い前述のマスリパトナム地方からは上質の棉布が多量に産出したことを述べている。いずれにしても紀元二世紀の終り頃には、アーンドラデーシャは、活潑な商業活動、手工業活動の時期にはいつていたということができる。

四

さて、アーンドラ・デーシャにおける宗教事情について考察するに、遺跡を中心にかんがえるならば、后六世紀ごろまでのものは仏教に関するものが圧倒的に多く、七世紀以降のものはバラモン教あるいはヒンドゥー教に関するものが多いという結果になっている。そのことは、その地方に仏教が普及した時代を物語るものであり、また七世紀にその地方を旅行した玄奘の記述にもあらわれている。すなわち、玄奘はガンジャーム——カリンガバトナム——ベラール——ヴェンギーラ——ダーニヤカタカ——クールスールというように、この地方を旅行しているが、いづこにも天祠が多く異道の多いことを特筆している。

仏教の伽藍が多く僧徒の数の多いところでも、異道雜居のありさま、あるいは伽藍荒蕪の情況があらわれている。そして南へ行くほど露形の外道（現在でも南インドのこの地方には裸の遍歷行者が多い）の姿が眼につくことになっている。^④

ところで、これまでに発見されている遺跡を中心に確實に仏教が行なわれていたとみられる地をあげてみるならば、およそつぎのごとくである。

シャールィフンダム Śālihundam
ラーマティールタム Ramatirtham
サンガラーマ Sanghārāma
コーダーヴァリ Kodavali
アルゴーラス Arugolamu
グンタパッレ Guntapalle
ジャッガッヤペエータ Jaggayyapeta
ラーミレッディパッレ Ramiredipalle
アッルル Allūru
ベエーズワダ Bezvāda
グディヴァーダ Gudiṽāda
ガンタシャーラー Gaṇṭaśāla
ナーガールジュナコンダ Nāgarjunakoṇḍa

チェジュラーラ Chejāla

ガリカパードゥ Garikapādu

ゴーリ Goli

アマラーヴァティ Amarāvati

バットィブロール Bratīpṛolu

ペッダマッドゥール Peddamaddur

チンナ・ガンジャーム Chinna Gaṇjam

ペッダ・ガンジャーム Pedda Gaṇjam

カヌバルティ Kanuparti

グーティ Gooty

これらの地は、ガンジャーム、アナンタブール (Anantapur)、ゴードーヴァリー、クリシュナ、グントウール (Guntūr) の各地区にまたがって散在しているものであり、いずれもスツープ (Stūpa) 〔仏塔〕、チャイティヤ Caitya 支提・制多・塔廟と同義にも用いられる) を中心とする遺址が発見されているところである。ところで、いまならべあげた地がすべてを網羅したものではないが、すくなくともシャータヴァーハナ王朝の栄えたころの、そしてそれに続くころの、仏教の根拠地となったところであるということができる。

しからばかような諸地点を中心にして、いかなる種類

の仏教が行なわれていたのであろうか。まず仏教の部派の中でもマハーサンギカ (*Mahāsāṅghika* 大衆部) 系統の仏教がよく弘通していたことが知られるが、その理由としては、つぎのことがかんがえられる。すなわち、かのアショカ王の治世に、伝道のために各地に長老が派遣されたが、その中に、マヒサマンダラ (*Mahisamāṇḍalā*) へ派遣されたマハーデーヴァ (*Mahādeva* 大天) 一行があった。マヒサマンダラは今日のマイソール地方において発見されているアショカ王の法勅のなか、シッタープール (*Siddāpur*, *Brahmagiri* の西一マイル) の法勅は、あきらかにマハーデーヴァ長老の影響のもとにあったところのマヒサマンダラの地方の人たちに対して発布されたものであったといわれている。そして長老はたんに現在のマイソール地方のみならず、さらに東の方のパッラヴァボーガ (*Pallavabhoga*) あるいはパッラヴァナード (*Pallavanad* 現在のグントウール地区 *Palnad*) のへも赴いたとかんがえられている。^⑧もしそうであったとすれば、この長老の開教によってアーンドラ地方にも、仏教が根をおろす端緒をなしたとかんがえることは不合理ではない。やがてシャータヴァ

ーハナの時代がきて、マヒサマンダラ地方もその王国の領土内に編入された。いわゆる大天派 (*Mahādevaka*) と呼ばれるマハーサンギカ系統の仏教が、すでにしつらえられていたパイプを通して商業活動の盛んになっていったクリシュナー河の下流地方に弘通して、大いに栄えるようになったのであろう。従来はただ漠然とアーンドラ地方に大衆部が行なわれたことがのべられたにすぎないが、パーリの伝承を重んじて、伝播の径路をあとづけるならば、上にのべたごとくであらう。

ちなみに、アーンドラदेशにおいてアショカの法勅の発見されている場所は、前掲グーティの西八マイルのエラグーディ (*Yerragudi*) とガンジャームの西北西一八マイルのジャウガダ (*Jaugada*) とであるが、前者はマイソール群 (*Masīgi*, *Palkigundu*, *Gāvmāth*, *Yerragudi*, *Brahmagiri*, *Jatīṅga-Rameśvara*) の東端に位置し、後者はマハーナディー (*Mahānadi*) 河口に近いダウリ (*Dhauri*) の法勅と同類に属するもので、カリंगा (*Kalinga*) の南端に位置している (現在ではオリッサ州に属する)。

さて、マハーサンギカ系統の仏教が行なわれた点をさらにもうすこし具体的にのべるならば、前掲のアマラーヴァティーには、うたがいもなくチャイティカ (*Cātika* 制多山部) が行なわれていた。またダーニヤカタカにはブルヴァシャイラ (*Pūrvasāila* 東山部あるいは東

山住部)が、さらにナーガールジュナコンダにはアパラ
 シヤイラ (*Apara aila*) 西山部あるいは西山住部)が行
 なわれていた。ナーガールジュナコンダにはその他にマ
 ハーサンギカ系統のバフールシュルティヤ (*Bahūśruti* =
 多聞部)、スタヴィラヴァータ (*Sthaviravāda* 上座
 部)系統のマヒーシャーサカ (*Mahīśāsaka* 化地部)
 ならびにヴィバッジャヴァーダ (*Vibhajjavāda* 分別説
 部)、セイロンのマハーヴィハーラヴァーダ (*Mahāvī* =
hāravāda 大寺派)も行なわれていた。以上は碑銘など
 の証拠によってあてづけられるものである。この他に
 「異部宗輪論」によれば、北山住部 (*Uttarāsaila*) が、
 「カタールヴァットウ」 (*Kāthāvattū* 論事) によれば、
 ラージヤギリカ (*Rājagirikā*) 王山部、シッターティカ
 (*Siddhathika* 義成部)、ヴェートウリヤカ (*Vetuly* =
aka 方等派) などの名がみえてゐる。以上あげた諸部派
 の思想学説については、いまは閑説しないが、これらの部
 派がならび行なわれていたさなかに、ナーガールジュナ
 およびその弟子アリーヤデーヴァによるマーディヤミカ
 (*Mādhyanika* 中觀派) があらわれたのであった。も
 しろん、これは大乘であるが、大乘とか中觀派とかいう
 語は碑文の上にはあらわれてこない。しかしながら、部

派の僧伽に対して大乘の立場がいかなるものであったか
 は、ナーガールジュナの著作とされる「十住毘婆沙論」
 等に充分に明示されている。

五

上述のチャイティカを初めとするマハーサンギカ系諸
 派はアーンドラ派 (*Andhaka*) とも呼ばれているが、
 このアーンドラ派に関して、とくに注目されることは、
 制多すなわちチャイティヤの崇拜ということで一般住民
 とつながっていたことである。当時における仏教のセン
 ターともいふべき役割を果たしたところは、ジャッガヤ
 ペエータ、アマラーヴァティ、ナーガールジュナコン
 ダなどであったとみられるが、それらの地にはマハーチ
 ヤイティヤ (*Mahācetiya* 大塔) と称せられるものが
 建立されており、それに附屬して種々の建造物がつくら
 れてあった。その大塔は大塔と称せられるだけあって、
 実に壮大なものであった。たとえばアマラーヴァティ
 の大塔の基壇の直径は約五〇メートルを有していたので
 ある。かかる巨大な仏塔の面影は、近年修復されたもの
 ではあるが、セイロンの古都アヌラダプーラ (*Anurā* =
hapura) の大塔 (*Ruanveli-dāgaba*) によつて偲ぶこ

とができるし、またかような大塔の工事の模様は大史 (Mahāvamsa XXVIII, XXIX) における記述によってうかがうことができる。ナーガールジュナコンダの大塔は〈もともと神聖な舍利を納めたる〉 (*dhāruvāra-pariṇiśāhita*) ものであった。すなわち、そこには仏舍利が安置供養されていたのであり、その仏舍利は約三五年ほど前に発掘されている。

これらの大塔ならびに大塔附属の諸建造物 (制多堂、祠堂、集会堂、僧院等) の建立に際しての寄進者がいかなる層の人たちであったか、またいかなる願いのものと、寄進が行なわれたか、さらにまたそれらの寄進が仏教のいかなる種類の僧伽に対してなされたかということについては、その建造物に使用されていた石柱、石板その他に刻まれた銘文によって知ることができる。^⑤ これを要約的にいうならば、寄進者にはシャータヴァーハナ、イークシュヴァークの王、王妃をはじめとする王族、前に一言したマハーセーナパティ、比丘、比丘尼、優婆塞、優婆夷、長者、商人、各種の組合などがあげられる。とくに気付く事柄は、イークシュヴァークの王家に属する婦人たちを頂点とするアーンドラの女性が多くみられることである。かの女たちの豊富な寄進の記録

は、婦人が社会生活において目立つはたらきをすることができるような権利をもったことを示すと同時に、敬虔な仏教徒としての婦人が多く存在したことを物語っている。寄進の目的としては、自他の現世と来世における利益安楽、涅槃の証得、あるいは先祖に対する供養、死者に対する追悼、あるいは自身や家族の無病長寿などが願われてあったことを知る。とくに気付く点はへ一切衆生の利益安楽のために〈おこなわれた寄進の多いことである。つぎにこれらの寄進の相手としては、すでに前に一言したごとく、マハーサンギカ系の部派が多いのであるが、またなかにはテーラヴァーダ系のももあり、あるいはまた、そのような部派名をまったく示さないものもあるのである。大乘は、このような情況の中で菩薩思想をもって、次第に広く深く浸透しつつあったとみられるが、ナーガールジュナの「十住毘婆沙論」は、塔寺をめぐって、純然たる部派の出家者なる比丘の集まり (声聞僧伽 *Sravaka-saṅgha*) と菩薩の集まり (菩薩衆 *Bodhisattva-gaṇa* 出家菩薩ならびに在家菩薩) とがあったことをのべ、これらの宗教生活を説いている。^⑥

さて、このようにしてアーンドラの各地に著名な大塔をもつ寺院が実際に活動しており、またそのかに数多の小塔が林立して、一般住民のあいだに仏塔崇拜が盛んになったのがこの時代であった。ところで、かかる仏塔崇拜は、何もこの地方のみの現象ではなく、広くインドの西部にも北部にも、また中部にもみられた現象であるが、チャイティカ、すなわち、制多山部なる名をもつ部派が栄えたアーンドラ地方は、他の地方とは別に、とくに考慮せねばならないものがあるようである。われわれはここで大乘の般若思想と、アーンドラ地方に行なわれていた部派との関係についての興味ある問題について一言しておかねばならない。セイロンとの交通上の関係から、アーンドラ地方には、かのブッダゴース(Buddhaghosa)のしるすところの、へ大空宗と名づけられる方広部(Mahāsūvāsa-saṃhāta-saṃhāta-velūyaka)なる一部派が存在したことが推定されるが、この部派は空思想を強調した部派であった。この派は方広蔵(Yeṭṭhāpiṭaka)なる聖典を伝持していたが、それはおそらく方広(Vaipulya)と名づけられる大乘経典、なかく般若経をふくむ経典の集成であったに相違ない。その理由は、「智度論」にいう方広道人はヴェートウリヤ

カ(Vetulyaka = Vetulla-vādin)を指したものとみられるからである。「智度論」においては方広道人について

更有三仏法中方広道人言。一切法不生下滅。空無所有。譬如三兔角龜毛常無。如是等論議師輩。自守其法。不_レ受_三余法。此是実余妄語。^⑤

とのべている。「智度論」はその箇処において、まず外道の出家者の法についてのべ、つぎにヴァトシプトリヤ(Vātsīputrīya 犢子部)の比丘の言、サルヴァースティヴァーダ(Sarvāstivāda 説一切有部)の道人の輩の言、方広の道人の言というように、諸派の説をならべあげている。また「三論玄義」は二諦を迷失するに凡そ三人有りとして、その二番目に

二者学大乘一者、名三方広道人。執_二於邪空、不_レ知_二眞有、故失_三世諦。既執_二邪空、迷_二於正空、亦喪_三眞矣。^⑥

とのべて、方広道人を批判している。ところで、このヴェートウリヤカ以外に大乘の経典を受持した部派のあったこともあきらかである。アヴァロキタヴウラタ(Avalokiteśvara 観誓)の「般若灯論復釈」(Prajñāpradīpa-ṭīkā)には

マハーサンギカ(いっぴは Lokottaravāda 説出世部)

のピタカのなかに大乘が所属し、それより十地經と諸般若經などの大乘經典が出る、マハーサンギカのプールヴァシャイラとアバラシャイラからも俗語で般若波羅蜜などの大乘經典が出る……とのべている。

いずれにしても、マハーサンギカ系の諸部派が大乘の影響を受けて存在したこと、あるいはまた、それら諸部派に属した人が大乘に転向して、いわゆる出家および在家の菩薩としての宗教的実践を行っていたことが知られるのである。かような時期に大乘の出家菩薩たるナーガルジュナがあらわれて、「中頌」(Madhyamaka-kārikā)を説いて部執を斥け、仏教の正意を顯わしたのであるが、かれに「十地經」の註釈である「十住毘婆沙論」があり、「般若經(大品般若)」の註釈である「大智度論」があることの意味は充分に首肯できるのである。そしてその宗教的社会背景として、赤土と碧空のあいだに仏塔の林立していたアーンドラ・デーシャを想起するのである。

七

ところで、「異部宗輪論」によれば、有部は塔崇拜に

大果ありと説くとのべ、制多山部、西山住部、北山住部の三部本宗同義と言って、諸菩薩は惡趣より脱せず、あるいは、制多(Caitra)を供養するも最上の果を得ることなしと言うとのべている。また化地部の枝末宗異義として、窣都波(Sāṅga)を供養する業は果小なりということをのべている。前に一言したようにアマラーヴァティの大塔などに拠っていたとみられるチャイティカ等の部派が、チャイティカを供養するも最上の果を得ないとい説いたというのは、一体いかなることであろうか。学者の中には、紀元出二世紀の初め頃に大衆部から分立して仏塔信仰を否定したこの部派(制多山部)が紀元前後にはすでにかかる大塔(アマラーヴァティ大塔)の寄進をうけているのは注目に値しよう、と論ずる人もあるが、これについてはつぎのごとくにかんがえられる。すなわち、チャイティカなどの部派が興起した初めのころは、有部などと同様に塔崇拜に大果ありと主張していたとおもわれるが(そうでなければチャイティカなどの如き名をもつ部派はおこりえない、紀元前後の時期になってその地域に般若經の思想が普及するようになるや、大乘の影響を受けて塔崇拜に対する考え方が変わり、最上の果を得ることなしという主張となったのでなからう

か。「異部宗輪論」の記述は、そのつくられた年代からみて、すくなくとも紀元以後における制多山部の説を採録しているとかんがえられるからである。

おもうに、塔崇拜は般若経や法華経における重要課題の一つであった。これを般若経についていえば、諸般若はいづれもその第三品において、塔崇拜（建立・供養）の功德を説いている。しかしながら、それは塔供養のみで能事終りとするものでなかったことはいうまでもない。「金剛般若経」には

復次須菩提。随説是經乃至四句偈等。当知此處一切世間天人阿修羅。皆應供養塔廟。何況有人人能受持読誦。須菩提。當知是人成就最上第一希有之法。若是經典所在之處。則為有仏若尊重弟子。

と説かれている。この経文中の塔廟とあるのが制多山部の制多でありチャイティヤである。ここには、般若の法門を説く經典が開示せられる場処は天人阿修羅の世界のチャイティヤたるべしとする般若経の立場が能く打ちたされている。これが大乘仏教運動として展開しつつあったとかんがえられる。そこで、チャイティカ等の諸派が起塔供養の盛んな社会にありながらも、その果は小であると説いて、大乘運動の波に乗りつつ、仏教本来の立

場に還えろうとしていたのではないかとみられる。

そのようにはいっても、人間の世界は所詮人間の世間であつた。カシミールの有部が譬喩者の説として紹介するところによれば、世尊は制多を旋遷すれば、一切は当に天に生ずることを得べしと説かれたというごとく、一般の大衆は次第説法 (*anu-pubbika*) をもって導かれなくてはならなかつたのである。ナーガールジュナはラトナーヴァリー (*Ratnapali* 宝鬘) やスフリレーカ (*Suhillekha* 親友書翰) をもつて国王 (シュリー・ヤジュニヤシャータカルニ王など) に仏教を説いて正しい政治が行なわれることを願うとともに、他方では「十住毘婆沙論」や種々の讃頌等をもつて、きわめて平易な説法の仕方での多くの人々に対して宗教的実践の道を説いたのであつた。たとえば、在家出家の菩薩が塔寺にいたつて礼敬をなし、献灯して仏・声聞・辟支仏・塔像・舍利を供養するならば天眼の果報を得、大法会において音楽を供養すれば天耳の果報を得、お練り供養を行えば神足の果報を得ると説いたごとくにである。しかしながら、ナーガールジュナの本領は、あくまで大乘仏教の根本思想である般若思想の祖述にあつたとかんがえられる。かれの「信」については、別稿において考察するであらう。

